

日本撮影監督協会 撮影助手育成塾の卒塾式

中山 秀一

表記日本撮影監督協会が主催している「撮影助手育成塾」は、すでに13回を重ねている。そして第13期生は、この1年間の講習を終えて、去る3月25日土曜日の14時から、卒塾式がイマジカの研修室で行われた。

そのあと、15時から五反田駅前のレストランに場を移して、卒塾謝恩会が開催された。会場では、塾の講師である現役カメラマンをはじめ、機材や実習の現場を提供した協力会社も参加して、終始和やかな雰囲気での謝恩会となった。

開会にあたり、協会理事長の兼松潔太郎塾長、協力会社のゲスト、講師たちから、卒塾生への祝辞と励ましの挨拶があり、謝恩懇親の会がスタートした。

最後に、卒塾生たちが各自謝恩の辞を述べた。塾生たちの構成は、大変ユニークで、一般の現役社会人で映画撮影の世界を志す人、すでに映像の専門学校などを卒業した人、そして最も多いのが、映像専門学校の最終学年在学生だということで多彩な塾生たちだ。

この塾は毎週土曜日に教室を開き、1年間で完結という日程なので、現役の社会人や、現役の在学学生でも参加しやすいという配慮がなされている。

謝恩の辞を最後に述べた小野里昌哉さんは、特に興味深い卒塾生だ。彼はすでに40歳を超える年齢で、しかも現役のデジタルカメラマンでもある。そして、この卒塾後間もなくマダガスカルに渡り、現地の若者をスタッフに加えて、『ミトウンジャ (Mitondra-運ぶ)』という劇映画の撮影を担当するという。

その映画は、マダガスカルの地勢からなる、歴史的にも特徴ある文化習慣をベースに、ある兄弟と家族の日常と、親戚との関わりを描く、2時間の作品だということだ。その作品が完成したら、それを題材に、当育成塾終了のカメラマンとしての体験と成果を、是非インタビュー記事に書きたいと思う。

Syuichi Nakayama
日本映画テレビ技術協会名誉会員



塾長が卒塾前の塾生たちに進むべき指針を訓辞



修了証書を手に塾長を囲んで卒塾生の記念撮影



女子卒塾生から花束を受ける兼松潔太郎塾長



謝恩の挨拶をする卒塾生の小野里昌哉さん